

2013春ボラ(または三陸地域再生 支援)説明会・総論



2013/02/04
法学部・中澤秀雄

いま三陸被災地に必要なこと



- 減少し続ける若年層人口に歯止めをかけ、地域の未来を切り開く。中長期的な生業の再建 → 熱血気仙塾
- 仮設住宅から高台移転するまでにはギャップがある。その間の健康・メンタル面のサポート → はまらいんや
- 将来のリーダーとなる子どもの育成 → 面瀬学習支援
- 漁業と生活の再建に寄り添い力になる → チーム次元
- 福島の現在と将来を考える → 和みの輪
- 時間距離でもっとも不利な場所に寄り添い、今後の課題を考える → はまぎくのつぼみ

Volunteer=志願兵とは

- 敢えてリスクを承知で、**一歩前**に出た人々
- 損得勘定でいえば損(単位も出ず、手弁当で行く)。そして予測不可能で危険な戦場の最前線に出る
- 自らの頭で考え、状況を切り抜ける人でなければならない。予想と違うとか、事前情報が不十分とかいって主催者に文句を言いかねない人は帰ってほしい。現場の状況は刻々と変わる(機動性)
- 年寄りにはしばしばボランティアをバカにするが、それは誰かに言われてする奉仕活動の古いイメージ。Volunteerであることに誇りを持ち、自ら時間空間を切り開ける人(自主性)だけが継続できる
- 宴会とは全く違う意味だが、快活にやらなければ続かない

分かりやすい「ボランティア」は被災地から撤退す



- 単に現地の様子を知りたい場合には、**JTB**等が企画する震災ツアーに申し込んだ方がよい。
- わかりやすい「労力奉仕」の局面は完全に終了した。いま必要なのは、「寄り添い」「頭を使う」こと。
- したがって、今回参加する方には、単発に終わらせない覚悟を求めたい。
- あまりに誤解が多いので、もう「ボランティア」という言葉を使わず「地域再生支援」「自立支援」等と言ったほうがよいかも知れない。

機動性・自主性のために: ルックアップせよ



- Footballの優れた「10番」は頭をあげてなくても状況を常に把握している(瞬時に**Look up**している)。これは日常生活でも全く同じことなのだが、学校という箱のなかでは気づきにくいこと。
- 要請されたタスクをこなす中でも、誰が何をしていて、どこに停滞が生じていて、どこをフォローするべきか、気づいている人とそうでない人がいる
- 自分でルックアップして動けない人は、現場ではしばしばお荷物になる。ボランティア同士は原理的に対等で、上官はいないから、叱ることができない。自分が状況を改善する役に立てたのか、節目節目で反省する時間を持つ。

理念・気づき力・人間力のない人は嫌われる

- 多種多様・大量の人々が2年間、東北に押し寄せた。その中で信頼できる人を見抜くには、第一に理念をちゃんと語れるかを見られる。
- ボランティアの大前提は地元との対話。つねに地域住民発。それを無視して自分のやりたいことだけをするのを自己満足という(そういう人が多いから、「ボランティア自己満足論」がはびこる)。よく耳を澄ませ、「**気づき**」の力を磨き、いったん聞いた話は忘れないようにする。
- 自分の身の回りのことができない、段取りを付けられない人は信用されない。「片付け方」「身体の使い方」を見るだけで、人間力は相当判別できる。

記録をつけよ



- まず「行く前にどのように想像していたか」「自分は何を求めて現場に入るのか」「自分をどう成長させたいのか、何を得たいのか」記録**record**しておけ。
- そして現場で気づいたことをメモし、寝る前に確認せよ。自分が何に気づいていなかったのか、何を見落としていたのか、だんだんに分かってくる。
- 各班・分隊では日替わりで記録係を決めるとよい。写真もできるだけ沢山撮る。
- 今回に限らず、ボラには学会から多額の寄付がよせられている。これらの人々に対して、帰任してから報告する義務がある。参加者は全員、レポートを書いてもらう。